

氏名	中越 利佳
授与した学位	博士
専攻分野の名称	看護学
学位授与番号	博甲第144号
学位授与の日付	令和4年3月24日
学位論文の題目	Health Action Process Approachによる20-30歳代女性の子宮頸がん検診の受診行動に関する基礎的研究
学位審査委員会	主査 岡崎 愉加 副査 高橋 徹 副査 實金 栄 副査 山本 登志子 副査 竹本 与志人

学位論文内容の要旨

本論文は、Health Action Process Approach（以下、HAPA）が20-30歳代女性の子宮頸がん検診の受診行動に適合できるかを検証し、HAPAの変数に影響するとされるソーシャルサポートと個人要因との関係性を明確化することを目的とした。

第1章では、子宮頸がんが20-30歳代の女性に及ぼす身体的・心理的・社会的影響について述べた。また、ワクチン接種や検診受診の個人履歴を一元管理し、子宮頸がん予防をシステム化している諸外国と比較し、わが国の子宮頸がん予防の主軸が個人の意図に任されていることを述べた。行動意図が行動に影響するとされる健康行動理論を用いた子宮頸がん検診の受診行動について文献検討した結果、わが国では、健康行動理論に基づいた観察研究や介入研究は少なく、介入研究の成果においては、検診受診意図は高められるが、有意な検診受診率向上までに至っていなかった。このような意図と行動の不一致を埋める理論としてHAPAに着目した。子宮頸がん検診の受診行動におけるHAPAの適合性を統計学的に検証した基礎的研究は、国内外において行われていなかった。子宮頸がん検診の受診行動におけるHAPAの適合性を検証するためには、子宮頸がん検診の受診行動に特化したHAPAを構成する概念を測定する尺度が必要とされるが、国内外の先行研究において尺度は開発されていなかった。そのため、HAPAに基づいた子宮頸がん検診の受診行動に特化した尺度開発を研究課題1とした。また、HAPAは意図形成までのMotivation Phaseと意図形成から計画を介して行動に至るまでのVolitional Phaseの2つのプロセスからなる連続した複合モデルであることから、縦断データを用い、子宮頸がん検診の受診行動におけるHAPAの適合性を検証し、HAPAの変数に影響するとされるソーシャルサポートと個人要因との関係性を明確化することを研究課題2とした。

第2章では、研究課題1を明らかにするために、7都道府県の20歳以上の女性1288名に質問紙調査を実施した。項目・信頼性分析後、尺度の構成概念妥当性、基準関連妥当性を検討した。結果予期尺度 (Outcome Expectancies: OE) として、肯定的結果予期 (Positive Outcome Expectancies: POE) 3項目、否定的結果予期 (Negative Outcome Expectancies: NOE) 3項目を開発した。自己効力感尺度 (Self Efficacy) として、Action Self Efficacy (ASE) 4項目、Maintenance Self Efficacy (MSE) 4項目、Recovery Self Efficacy (RSE) 3項目を開発した。計画尺度 (Planning) として、行動計画 (Action Planning: AP) 4項目、対処計画 (Coping Planning: CP) 4項目を開発した。各尺度の適合度指標は、 $CFI > 0.9$, $RMSEA < 0.1$ とモデルはデータに適合し、子宮頸がん検診の受診行動に特化したHAPAの構成概念を測定するために開発した尺度の信頼性・構成概念妥当性が証明できた。

研究課題2は、40都道府県の20歳以上の女性4535名に質問紙による縦断調査を実施した。第1回調査 (TIME1) は、Motivation Phaseを構成する質問項目、第2回調査 (TIME2) は、Volitional Phaseを構成する質問項目を調査し、縦断データに欠損値を認めない40歳未満の619名を分析対象とした。分析対象者をTIME1の時点で検診受診の意図がない対象者およびこれから検診受診を考えている対象者 (Pre Intenders/ Intenders) と、1回以上の検診受診がありこれから先も検診受診の意図のある対象者 (Actors) に分類し、行動のアウトカムを2019年度内の子宮頸がん検診受診とした。HAPAを基に仮定した検診受診行動の仮説プロセスモデルに、ソーシャルサポートと個人属性を統制変数とし、共分散構造分析により検討した。結果、Pre intenders/Intendersは、 $RMSEA = 0.048$, $CFI = 0.942$, $R^2 = 0.432$, Actorsは、 $RMSEA = 0.041$, $CFI = 0.945$, $R^2 = 0.402$ であり、Pre intenders/ IntendersとActors共にモデルはデータに適合し、HAPAは子宮頸がんの検診受診行動に適合することが証明できた。

HAPAの変数と個人要因との関係性は、Pre Intenders/ Intendersでは、検診受診意図へは「身近な人のがん」と「子ども」が正の関係性を示し、検診受診へは「子ども」が負の関係性を示し、子どもをもつ対象者への介入の必要性が示唆された。Actorsでは、「検診受診回数」が検診受診意図と検診受診に正の関係性を示しており、過去の検診受診が現在の検診受診意図と検診受診に影響していることが明確化された。ソーシャルサポートとの関係性は、Pre Intenders/ Intendersでは、「検診施設の行きやすさ」、「検診費用の補助」、「家族・友人の勧め」が検診受診に関係し、Actorsでは、「検診施設の行きやすさ」、「検診費用の補助」、「他検診と同時受診」が検診受診に関係していた。

第3章では、総括として、研究課題1・2の結果をふまえ、本学位論文のまとめと看護実践への示唆および本研究の限界と課題を述べた。本学位論文の成果は、

HAPA が 20-30 歳代女性の子宮頸がん検診の受診行動に適合し、検診受診行動という健康行動を高めるモデルであることを証明したことである。今後は子宮頸がん検診未受診者に対して、HAPA のプロセスに基づいた介入と対象者の個人要因に応じたソーシャルサポートを提供し、子宮頸がん検診の受診行動における HAPA の有効性を縦断的に検証していくことが課題である。

主業績

No.1	
論文題目	20-30 歳代の Health Action Process Approach による子宮頸がん検診の受診行動の検証
著者名	中越 利佳 岡崎 愉加 實金 栄
発表誌名	日本保健科学学会誌 第 24 卷 4 号 (印刷中) 2022.3.25 発行予定

副業績

No.1	
論文題目	ソーシャルサポートを含めた Health Action Process Approach による 20-30 歳代の子宮頸がん検診の受診行動の検証
著者名	中越 利佳 岡崎 愉加 實金 栄
発表誌名	母性衛生 第 62 卷 2 号 333-343 頁 2021.7
No.2	
論文題目	Health Action Process Approach による子宮頸がん検診受診行動に対する自己効力感尺度の開発
著者名	中越 利佳 岡崎 愉加 實金 栄 則松 良明
発表誌名	愛媛県立医療技術大学紀要 第 16 卷 1 号 1-9 頁 2019.12

関連業績

なし

論文審査結果の要旨

本論文は、子宮頸がん検診受診率が低迷し、リプロダクティブヘルスに影響を及ぼしているわが国の20-30歳代女性の子宮頸がん検診の受診行動を健康行動理論であるHealth Action Process Approach (HAPA) で説明できるかを統計学的に検証し、検診受診率向上のための支援に資する基礎資料を得ることを狙いとして研究した結果についてまとめたものであり、得られた成果は次のとおりである。

本論第1節では、子宮頸がん検診の受診行動に特化したHAPAを構成する概念を測定するための尺度開発の過程について述べられている。開発した尺度は統計学的基準を満たし、HAPAを構成する結果予期尺度6項目、自己効力感尺度11項目、計画尺度8項目が開発された。

本論第2節では、HAPAが20-30歳代女性の子宮頸がん検診の受診行動に適合できるかを検証し、HAPAの変数に影響するとされるソーシャルサポートと個人要因との関係性を明確化するための質問紙法による縦断研究について述べられている。検診受診行動を起こそうとする前の対象者と継続した検診受診行動がとれている対象者に分類し、対象者別にHAPAに基づいた子宮頸がん検診の受診行動における仮説プロセスモデルを構築し、ソーシャルサポートと個人要因を統制変数として共分散構造分析で検討している。結果、両対象者ともにHAPAに基づいた検診受診行動のプロセスモデルはデータに適合し、子宮頸がんの検診受診行動はHAPAで説明できることを証明している。また、HAPAの変数に直接的に影響を与えるソーシャルサポートと個人要因を明確化している。対象の個人要因に合わせて、HAPAのプロセスに沿った支援とソーシャルサービスを提供することにより、子宮頸がん検診の受診行動が促進される可能性が高まることが示唆された。本研究では、HAPAが20-30歳代女性の子宮頸がん検診の受診行動という健康行動を高めるモデルであることを統計学的に証明した意義ある結果が示されている。

以上の結果より、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認める。